

## 新人職員に話したこと

4月1日、十愛療育会では16名の新人職員を迎えました。一人一人に辞令交付をしながら、私たちの法人の事業を仕事の場として選んでくださった方たちだと思えば、初対面にもかかわらず、それだけで親しい気持ちが沸くのは毎年のことながら不思議な気持ちでした。よろしく願いいたします、と心から申し上げました。

辞令交付の後はこちらも毎年ですが「法人理念について」という題で私が1時間弱お話しすることになっています。今年は冒頭3月11日の東日本の災害について、「逃げてください」というアナウンスを聞きながら障害や高齢で身動きができない人をただ抱いて座り込み、逃げられなかった人たちがきつといたはず、その無念さを思う、という話から始めました。

法人理念として「横浜市における障害医療・福祉の中核となるよう専門性を高め、そのもてる機能を広く地域に提供し、障害児者・家族が、より安心して快適な生活を送れるよう支援する」と定められていますが、更に言うと、「可能性を信じ重い障害児者の人たちの健康と命を守り、人としての尊厳を守る」ということになると思います。障害児者の地域生活支援を使命とする中で「家族支援」として専門医療の提供、相談機能、加えてレスパイトも本人支援につながる欠かせない役割だと考えています。

重度身体障害者入所施設「たち」は今年には新人を採用していません。したがって重心施設である「横浜療育医療センター（横療）」と地域療育センター「あおば」の二つの施設の職員にお話することになりました。

「あおば」は幼児の早期療育の場として診療と相談と通園が主の施設です。横療は18歳を越えた重症者対象の入所施設です。いわば「あおば」は障害のある子どもたちと親の方が仲間と出会い、専門家と出会う人生の最初の社会です。「横療」は地域生活を送ってきた人たちが本人の重症化と養護者の高齢化で医療や介護が家庭では無理になった方々が入所してくるところです。「あおば」が人生のfirst stageだとしたら「横療」は人生のlast stageだといえます。

「あおば」勤務になる方々には親の方々はまだ自分の今までに刷り込まれてきた「できることはいいことだ」という価値観—これはすなわち社会の価値観でもあります—と戦っている人が多いこと、その人たちにお子さんの可能性とそのお子さんの存在の大切さを真心をこめて伝えてほしい、一人ではない、あなたのお子さんを大切に思う人間がここにいますと側に寄り添ってほしい、と思います。そしてその職員の思いを親の方が信じられたとき、親の方は心の奥深く沈んでいる「孤立」から救われるのではないかと思います。人は関係の中で生きています。決して一人では生きていくことはできません。家族に異変が起こったとき、災難が降りかかったとき、そのお子さんを良く知る人、そのお子さんを大切に思ってくれる人がどれだけそのお子さんの周りにいるか、それがお子さんにとっての財産になります。親は遺産としてお金を残すのではなく、人という財産をお子さん

の貯金通帳にたくさん入れてほしいと思っていますが、その貯金通帳の最初の1ページに「あおば」が「あおば」の職員の名前が書き込まれてほしいと願いました。そんな出会いがここにいる「あおば」の新人職員と「あおば」に通ってくるこどもたちの間に生まれることを期待したいと思います。

一方「横療」はある人たちにとっては終の棲家です。決して快適とはいえない居室、その他のハード面を人間関係というソフト面で補っている状況を話しながら、いつも和やかな空気が「横療」の中に流れているように、と願っています。重症心身障害児者と呼ばれる人たちは生活の全てに人の手が必要です。誰かの手を借りなくては生きていくことが難しい人たちです。あなた任せの日々だと言っても過言ではありません。あなた任せのあなたがここにいるあなたになるのです。私たちは本人ではありません。当然家族でもありません。本人や家族の気持ちを察するには自分の想像力が頼りです。

人間の柱は情緒だと数学者の岡潔さんが言っています。脳科学者の松本元さんは「知は情のスレーブだ」と書きました。司馬遼太郎さんは「星の名前を覚えるには学ばねばなりません、星を美しいと思う心はみんな持っています」と書いていると読みました。みんな心・情は持っています。それこそが人間の中心なのです。先日もサックスの演奏を「横療」のメンバーが気持ちよさそうに、ある人は首を振りながら、ある人は手や足を動かしながら聞いていました。音楽は頭で聴くのではない、心で聴くのだ、とそのほほえましい光景を見ながら確信しました。みんながもっている心、その心をしっかりゆさぶりたいと思います。

何よりもくその人の心を思いやる>ということが大切だと考えています。私自身は小さな重症の子どもたちと学校教育のなかでであって40年になります。この年月のなかで、何度も「そこまで思いが行き届かなかった」「この重い障害のある小さな彼が将来一人でケアホームで職員の手を借りながら独り立ちするなんて思ってもみなかった」等という自分の想像力を破られる経験を何度もしました。そんな経験をしながら私自身は40年前よりいくらか人間が大きくなれたのではと思います。この仕事は人間についていくつもの気づきや教えを与えてくれます。そんな体験が待っています。人は限りなく大きくて、深い存在だと思います。

自分の学んだ専門性を生かし、障害のある人たちの側にいたいという志をもってこの法人を職場として選らんでくれた新人の皆さんが、初心を忘れることなく、これからの日々を明るく元気に送れることを心から願いました。

最後に10年前に読んだ広島養護学校の生徒の晶くんの詩と茨木のり子さんの「自分の感受性くらい」を紹介しました。

あきらくんの詩

おかあさんがなきました  
おふろばでなきました  
ぼくのことになきました  
ぼくはあたまがええからすぐわかりました  
おかあさん くらいかていはやめんさい